

令和3年度第1回鳥取県教育審議会学校等教育分科会（要旨）

- 1 日時 令和3年4月28日（水）午前10時から午前11時30分まで
- 2 会場 鳥取県立図書館2階大研修室
- 3 出席者 小椋分科会長、二階堂委員、重本委員、高尾委員、渡邊直委員、中村委員、藤田委員、金川委員、三木委員、岩田委員、西川委員、田中オブザーバー、金山オブザーバー
（教育委員会）中田教育次長
（高等学校課）酒井課長、福本室長、尾崎課長補佐、新田指導主事、石原指導主事

4 要旨

（1）今後の学校配置等の在り方について

- 学校のテストの点数だけで高校を選ぶのではなくて、（それ以外の要素で）より魅力化した高校を作ってはどうか。
- 人数が減ることでデメリットもあるが、ブランド化に繋がる。
- 全県で50学級ぐらいたした場合、2人ずつ定員を減らせば100人減る。学級定員減により学級数を維持するという考え方もある。
- 私立学校としては、生徒減に合わせて、比例的に生徒を減少させることは受け入れ難い。
- 答申案の中山間地の高校をなんとか残そうという強いメッセージを政策の中でも打ち出していくべき。
- 「職業学科に来る生徒に最先端の職業人になる」ということを要求すると苦しい生徒たちも結構いるので、表現を考慮すべき。
- 結局偏差値で学校を振り分けているのが事実ではないか。15歳か16歳の子どもたちに可能性はいくらでもあるので素晴らしい教員がいれば、元々偏差値が低い生徒もより伸ばすことができる。
- （進路の考え方など）中学校の教員と高校の教員が、普段から情報共有、情報交換をして意識合わせを行うべきではないか。

（2）中高一貫校について

- 中高一貫校を作るのは簡単ではなく、様々な問題（高校からの入学生の対応など）が含まれているのでそれをクリアしていかないと難しい。
- 学校全体を中高一貫にするのではなく、県立高校の一部に、中高一貫学級を作る方法はとれないか。
- 一般の保護者の方は、現在、どういう議論がなされているか知らない状態で毎日過ごしている。答申をきっかけに、学校の選び方や考え方を真剣に考えるチャンスになると良い。
- 自分の将来や進路をある程度、本気で考える期間が長いことは、中高一貫校の一つの大きなメリット。
- 公教育の公立学校が、小学校が終わった段階でエリート中高一貫校を目指した競争が始まるという一部の優秀な子どもたちの要求に応えるということを、公教育公立学校の教育政策として目玉にするということは、大きな禍根を残すと思われる。

（3）その他

- コロナ禍により学力の格差が起きていないかという現状を把握しておく必要があるのではないかと。
- 生徒の読解力を支える基礎力の育成というのは大変素晴らしいことで、新しい時代、施策の中に具体的な策が入ってくると良いと思う。